

# 体験談

情報学プログラム

栗城 康一

私は、川崎市在住の会社員。2019年3月、放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻情報学プログラムの修士課程を修了した。当時の体験を二つ記したい。

一つ目は、ゼミ。ゼミは、千葉や東京の学習センターで実施された。会場までは最大2時間を要したが、すべてのゼミに参加した。課題に対する考え方が広がり、その都度たしかかな進捗を実感した。

二つ目は、修了生の修士論文。放送大学附属図書館（以下、図書館）には、一部修了生の修士論文（以下、論文）が所蔵されている。放送大学の大学院生は、図書館にて申し込みのうえ、閲覧が可能だ。私は図書館に併設されたセミナーハウスに宿泊し、図書館で論文に目を通した。さすがに3日間の閲覧は骨が折れたが、執筆にあたって大変参考になった。時機を考慮した閲覧をお勧めしたい。

成果の実感までは、約2年。決して長い道のりではないが、ときに手詰まりも感じた。同志の存在は、心強い。同志とともにゴールを目指してほしい。

「根拠は何？」大学院で論理的思考を身につけた

情報学プログラム

廣瀬 司

大学院を修了して何を得ただろうか。私は、放送大学大学院で論理的思考を身につけることができたと考えます。

大学院では、Webゼミを通じて同期の仲間や、中谷多哉子先生と熱く、深く、議論を交わしました。ゼミでは、常に「根拠は何ですか？」と問われました。私は大学院での研究を始めた当初、論文の前提や仮説があいまいで説明に行き詰まることが多々ありました。しかし、先生から研究の仕方の指導を受け、必要な情報収集を行い、到達地点の目標を立て、研究を進めるうちにうちに、「何故なら」と答えられるようになりました。私にも論理的思考が身に着いたと思います。今でも、頭の中に中谷先生の「根拠は何ですか？」という声が出て、思い込みや飛躍しがちな思考にストップをかけ、熟考することを促してくれます。

そして、大学院生活で得た大事なものは、ゼミ仲間です。Webゼミでしたが、同じ時間を共有し、悩み、お互いの研究を理解し、交換した意見や鋭い指摘は新たな発見となり、課題解決へのヒントとなりました。私にとってゼミ仲間の声は大きな励みとなり、修論を書き上げる原動力となりました。

また、研究会発表は3回行いました。発表の機会を得ることで、論文執筆や口頭発表のプレゼンテーション技術も身につきました。専門家の貴重な意見も頂戴できました。人に伝える能力と、人から意見を聞く能力も向上したと思います。

私は、大学院で身につけた論理的思考を仕事で起きる様々な問題解決に活用しています。大学院での経験を実務に反映し、社会人としてのアウトプットも得ています。現在私は、大学院修了後、学部在籍して研究活動を続けています。研究会等の発表の場が次への研究課題へと続いていき、これを繰り返しながら、さらに上のステージを目指しております。私の最終目標は、私の研究テーマを世界中の人に知ってもらうことです。大学院はそのために必須の能力、すなわち論理的思考を身につける場であったといえます。

## 敵を知り、己を知る

「知彼知己者、百戦不殆」。紀元前 500 年ごろに『兵法』に記された言葉です。日本語に書き下すと、「彼を知り己を知れば百戦殆からず」、現代語にすればおなじみの「敵を知り己を知れば百戦危うからず」になるでしょうか。多く引用されている英訳は、1910 年の Lionel Giles による “If you know the enemy and know yourself, you need not fear the result of a hundred battles.”らしいのですが、Google も DeepL もまだこの訳文は登録されていないんだな…というようなことをグダグダ調べてしまうのは翻訳者の性でしょうか。いきなり引用から初めてしまいましたが、私は「敵を知る」ために情報学プログラムの門戸を叩きました。当時、人間翻訳者の私にとっての最大の敵は「機械翻訳」でした。2016 年に Google 翻訳が登場してから、翻訳は「10 年後にはなくなる仕事」とまで言われていました。そこできちんと機械翻訳がどういうものなのか、人間の翻訳と何が決定的に違うのか知りたいと思い、これが私の「問い」になりました。

修士課程は 2 年間ありますが、実際に修論を書き始めるまでに限れば、1 年半程度しかありません。この期間に、自分の内にある「問い」の種を育て、枝葉のある状態まで育てねばなりません。種は私たちの中にあるものですが、育て方はまったくの素人なわけで、ここで指導教授の先生のお力を借りることになります。最初の合同ゼミで一緒した先輩に、「よい論文を書いた先輩は、先生にこまめに進捗を報告していた」というアドバイスをいただいて研究生活をスタートしました。しかし、狙い通りの先行研究がないとか、何ヶ月も Python でうまく処理ができないとか、その道のりは平坦ではありませんでした。それでもなんとか種を育てていき、論文の構成が決まれば、いよいよ修士論文の執筆です。書き始めると、そこからは孤独な作業が続きます。自分の頭で考えていたことを文字にしていくのは、楽しくもあり、厳しくもありました。孤独な作業とは言え、独りよがりでは自分の考えを正確に伝えることはできません。ここでも客観的な視点の先生のご指摘や先生との議論は大きな支えとなりました。

こうして四苦八苦しつつも修士論文を何とか書き上げ、考査も終わってみれば、研究をやってよかった、がんばってよかったというのが正直な感想です。直接自分の仕事が楽になったわけでもなければ、世の中が変わったわけでもありません。それでも、

自分の中で何か小さな問いが生まれたら、それを丁寧に追いかけていくと、何かしら自分の考えとして育っていくことを実感できました。これは本当に大きな収穫でした。これから先、再び論文を書くことはないかもしれませんが、日常で心に浮かんだ種を、「なかったこと」にするのではなく、きちんと自分の意見はどうなのかと向き合えるようになれたと思います。

敵を知るために挑戦した修士課程でしたが、結果として「己を知る」ことも学ぶ機会となりました。修士課程で迷っている方がいらっしゃるようでしたら、ぜひ挑戦してみてください。新しい学びがきっとあるはずです。

放送大学大学院へ進学するときの私の不安は、入学試験の面接試問から始まりました。自分なりに研究の計画をまとめ準備して臨んだつもりでしたが、面接試問が始まると、準備してきたことが全く不十分であったことを知らされました。はじめのオリエンテーションにおいて、指導教員である芝崎先生との初顔合わせが終わると少し不安が解消されましたが、研究内容をどのように定めるかは霧の中にいる感じで、見通しを立てることができませんでした。その後、メールのやりとりや対面での指導を頂く中で少しずつ研究内容を絞り込むことができました。

大学院1年目の最大の課題は、22単位の科目の修得と研究テーマの絞り込みでした。ラジオ視聴による講義は、音声だけで理解することができるのかという不安がありましたが、いざ始めてみると、内容が分かりやすく構成されていて聴きやすいものでした。特に「音楽・情報・脳」の講義は、これまでの私の常識を覆すとても興味深いもので、楽しく講義を視聴しました。オンライン講義は、プレゼン資料や先生の表情を見ながらの講義で、自分のペースで進めることができました。講義を受けることに対する不安はないものの、1人で学習することの辛さはこれまでに体験したことのない感覚で、断念しようかと悩んだこともありました。そんな中で救いになったものは、対面でのゼミ活動でした。定期的に東京に足を運んで、ゼミ生と会って話ができることや、先生から頂く研究へのアドバイスは前向きに大学院の生活をおくる支えになっていました。2年目はCovid-19の影響から、対面でのゼミ活動ができなくなりましたが、1年目の経験から不安はなく、「とにかくゼミ活動はすべて参加する」ことを目標に進めることにしました。先生のご配慮で、2か月おきぐらいのペースで行っていたゼミ活動は1ヶ月ペースでのオンラインによるものになりました。回数が増えたことで時にはしんどいこともありましたが、研究への行き詰まりが多くなる中で、ゼミ生からの指摘や先生からの一言は最大の励みになりました。

また、修士の研究の中で得られた貴重な経験は、学会での発表です。入学時のオリエンテーションの際に、まだ研究内容が定まらない私たちに、先生から「できれば学会で発表してほしい」とのアドバイスを頂きました。私は研究のテーマが定まらないときに、学会への発表はハードルが高いなあというのが本音でした。また年齢が高いのに、レベルの低い自分の発表をすることへの抵抗もありました。研究が進んでいく中で、学会発表のことを先生に相談したところ、背中を押していただくことで学会発表という貴重な経験を得ることができました。

放送大学での芝崎先生やゼミ生との出会いは自分の人生に大きな財産となりました。感謝いたします。研究活動を今後にも活かし、生涯の学習にも貪欲に取り組み、人生の糧にしていきたいと思えます。